技術の創造性：西田幾多郎と技術の哲学　　村田純一

西田幾多郎は、技術を自らの哲学体系の中核に据えた、日本でのみならず世界的に見ても稀有な哲学者である。
西田によると、根源的な意味での実在する世界とは、主観と客観の対立を前提としたうえで理解された客観的世界でもなく、また主観的世界でもなく、むしろ、そのなかでわたしたちが生まれ、働き、そして死んでいく世界として理解しなければならないものである。つまり、実在の世界とは、わたしたちが「世界内存在」しうるような世界と考えねばならない。西田は、このような実在の世界に備わる論理構造をさまざまな仕方で表現したが、哲学論文集第一から第三の出版された１９３０年代になると、その論理を技術という言葉を使って集中的に表現するようになった。これらの著作では、人間が道具を使って世界に働きかけるともに、同時に逆にその世界から働きかけられる存在であることが強調され、そうした人間と世界の関係が、「行為的直観」「絶対矛盾的自己同一」などの概念によって表されることになる。これらの概念はどれも、わたしたちがそのなかで生きている世界がもつ「作られたものから作るものへ」という創造的な論理を表現するために用いられており、その論理を西田は「技術」という言葉で表現したのであった。
なぜ西田は、根源的な実在の世界の論理を技術という言葉で表現するようになったのだろうか。なぜ西田は、世界のなかに存在する人間のあり方を解明するために、道具を使いながらものを制作する活動のあり方を手掛かりにしたのだろうか。これらの問いに対しては西田自身がさまざまな形で答えている。それに対して本発表では、少し西田から距離をとって、現代の日本に生きるわたしたちが技術を哲学の問題として取り上げる場合に出会う問題を手掛かりにして、西田における技術の意義を考えていくことにしたい。
発表者が考えているのは以下の問題である。（１）なぜ技術は哲学の基本問題と見なされることが少ないのか？（２）ハイデガーの技術論にどのように対処したらよいのか？（３）現代の技術哲学に大きな影響力を持っている社会構成主義の議論の意義をどのように考えたらいいのか？（４）なぜ１９３０年代に盛んだった（西田、三木、戸坂などの）技術の哲学が現代日本では無視されているのか？
発表者の考えでは、西田の技術哲学を取り上げることはこうした問題へ回答を与える試みとなり、その試みを通して、西田の技術哲学の現代的意義について語ることにつながると思われる。最後の（４）について触れることは、１９３０年代の日本の歴史状況を振り返ることによって、それとの対比で、現代に生きるわたしたちにとっての哲学の意義を考える契機となるだろう。